

# 社会的養護経験者の道内定住とパーマネンシー保障

北海道大学大学院教育学研究院 准教授 井出 智博

## I. 問題と目的

### 1. 社会的養護とパーマネンシー保障

社会的養護とは様々な事情により家族と暮らすことができない子どもを公的な責任で保護・養育する制度であり、児童福祉法によって定められた全国の児童福祉施設や里親家庭などで約6万人の子どもが暮らしている。児童福祉法の定めるところにより、おおむね18歳を超えると施設や里親家庭から離れて自立することが求められるが、家族の後ろ盾がない中での自立となるために彼らの“その後”には様々な困難が待ち構えている。例えば非正規雇用率や生活保護受給率の高さ<sup>1)</sup>、離職率の高さ<sup>2)</sup>などがその困難さを示している。また、施設退所者を対象とした調査<sup>3)</sup>では施設を離れた後、強い孤立感や孤独感などメンタルヘルス上の問題も大きいことが示唆されている。

こうした中、社会的養護のような公的な支援を必要とする子どもたちが養育者との関係や慣れ親しんだ環境を離れることなく暮らし続けることができるパーマネンシー保障が重要な課題のひとつとなっている。2017年に今後の社会的養護の在り方として示された「新しい社会的養育ビジョン」にも示されている通り、パーマネンシー保障は第一に特別養子縁組により永続的な家族を作ることが推奨されているが、現実には里親家庭や施設で暮らし、そこから自立していく子どもも少なくないため、彼らに対してもパーマネンシーをどのように保障するかということは重要な支援上の、あるいは制度設計上の課題となっている。先述の通り、おおむね18歳、すなわち大学等への就学や就労をひとつの契機として、彼らは里親家庭や施設を離れて暮らすことを求められるが、例えば全国的に見れば東京や神奈川といった大都市圏では彼らが育ってきた里親家庭と施設と就学、就労の選択肢が同一の、あるいは近接する地域に存在するのに対して、地方ではそうした選択肢が限定的で、彼らが育ってきた里親家庭や施設とは異なる地域で新たに生活を始めることを余儀なくされることも多い。すなわち、就学や就労のために移住することが前提となるため、パーマネンシー保障が困難な状況にある。

### 2. 北海道が抱える地域コミュニティの問題と社会的養護

本稿ではそうした問題について北海道を舞台に考えてみたい。周知のとおり北海道は広大な面積を有し、道内は14の総合振興局・振興局に区分されている。各振興局管内には例えば旭川市や函館市といったような中核都市（振興局所在地）とその周囲に所在する市町村による地域が形成されている。しかし、実際には人口は札幌都市圏に集中する傾向にあり、企業や大学等の学校なども同様の傾向にある。結果的に、札幌都市圏以外の市町村では人口の流出、特に若者人口の流出が続き、地域の産業の衰退という大きな社会問題につ

ながっている。

北海道の社会的養護の状況に目を向けると、令和 2（2020）年度福祉行政報告例によると、道内では 1,700 名あまりの児童（以下、社会的養護児童）が里親家庭や施設で暮らしていることが示されている。彼らの保護や支援において重要な役割を担う児童相談所は、政令指定都市である札幌市の他、札幌市、旭川市、帯広市、釧路市、函館市、岩見沢市、室蘭市、北見市の道内 8 か所に道の児童相談所があり、稚内市、苫小牧市には分室が設けられている。こうした中で、先述の通りそれぞれの児童相談所が担当する子どもやその家庭の所在地は広範囲に及び、家庭的な事情も含め子どもたちは里親家庭や施設への措置を経て、広域の移動を経験する場合もある。

### 3. 本研究の目的

里親家庭や施設での暮らしを経験してきた社会的養護児童のように、生い立ちの中で様々な困難を経験してきた者たちの自立や移行は必ずしも順調に進むわけではない。例えば Walther & Stauber<sup>4</sup>が指摘したようなヨーヨー型の移行 (yo-yo transition) のように、不安定で時には適応的な自立や移行が成し遂げられない場合もあるため、社会的養護を離れた後も継続して支援が受けられること、すなわちパーマネンシー保障が重要な意味を持つ。しかし、ここまで見てきたように、就労や就学など、進路を選択する時、里親家庭や施設がある地域から離れることを余儀なくされる北海道の地方のような場所ではその保障は容易なものではなく、時にはその地域に合った形でパーマネンシーの保障が提供される必要がある。そのため、本稿では道内の社会的養護経験者（以下、ケアリーバー）が就学や就労を機に、どのように地域を移動しているのか（いないのか）についての動向を量的な調査から明らかにするとともに、ケアリーバーや里親、施設職員などの代替養育者、さらには彼らの自立にかかわる支援機関の職員等へのインタビュー調査を通して、道内の社会的養護児童・ケアリーバーのパーマネンシーを保障するうえで何が必要かを明らかにしたい。

## II. 研究 I

### 1. 目的

道内の児童養護施設を対象にした調査を実施し、施設を巣立った子どもたち（以下、施設出身者）の居住地がどのように変遷したのかを把握する。

### 2. 方法

道内の児童養護施設 23 か所を対象に、郵送による質問紙調査を実施し、2019 年～2021 年の 3 年間に施設を退所した者の措置前、措置中、措置解除後の居住地域（市町村）と進学、就労の状況を尋ねた。調査は 2022 年 10 月～11 月の間に実施され、一連の手続きは共同研究者が所属する札幌大谷大学短期大学部の研究倫理審査を受審し、承認を得たうえで行われた。

### 3. 結果と考察

18 施設から 181 名の施設出身者についての情報が得られた。ここでは大まかな地域の移動状況を把握するために 3 時点の居住地域を札幌市、旭川市などの中核都市を除く市町村を 14 の振興局に分け、措置中から措置解除後の移動状況を整理して報告する。

#### (1) 進学者の居住地域の変遷 (表 1)

高校卒業後に大学や専門学校に進学した人 (以下、進学者: 45 名) のうち 32 名の措置解除後の居住地は札幌市であり、彼らが暮らしていた施設がある地域は札幌市が最も多く 9 名であったものの、後志管内 5 名、オホーツク管内 4 名といったように札幌都市圏以外から多くの施設出身者が移動してきている様子が示された。さらに彼らが施設に措置される前に居住していた地域を見ると一部は措置前に札幌市で暮らしていた経験があるもののほとんどが所縁があるとは思えない状況の中で札幌市に移住していた。

表 1 進学者の居住地域の変遷

解除後			措置中	
32	札幌市	←	9	札幌市
		←	5	後志管内
		←	4	オホーツク管内
		←	3	石狩管内
		←	3	函館市
		←	2	旭川市
		←	2	帯広市
		←	2	上川管内
		←	1	胆振管内
		←	1	後志管内
5	石狩管内	←	2	後志管内
		←	1	上川管内
		←	1	札幌市
		←	1	旭川市
3	道外	←	1	函館市
		←	1	札幌市
		←	1	空知管内
2	胆振管内	←	1	函館市
		←	1	胆振管内
2	旭川市	←	2	旭川市
1	函館市	←	1	函館市

#### (2) 就労者の居住地域の変遷 (表 2)

高校卒業後に企業等に就職した人 (以下、就労者: 135 名) のうち最多の 32 名が措置解除後に札幌市を居住地としていたが、進学者に比べるとその割合は低く、全体的な傾向としては中核都市やその近郊の施設で暮らした若者たちがその中核都市や近隣の中核都市に就労している傾向が伺われた。進学者に比べると、措置前から措置中、措置解除後に至るまで同一、あるいは近隣の振興局管内で暮らす傾向が強かったが、札幌市には道内広域から集まる傾向がみられた。

表 2 就労者の居住地の変遷

解除後			措置中		解除後			措置中	
32	札幌市	←	13	札幌市	8	胆振管内	←	6	胆振管内
		←	6	石狩管内			←	2	後志管内
		←	3	上川管内	7	釧路市	←	6	釧路市
		←	3	胆振管内			←	1	函館市
		←	2	函館市	6	函館市	←	6	函館市
		←	2	後志管内	5	林-ツ管内	←	4	留萌管内
		←	1	日高管内			←	1	上川管内
		←	1	留萌管内	5	十勝管内	←	3	帯広市
←	1	帯広市	←	1			釧路市		
13	帯広市	←	11	帯広市	←	1	上川管内		
		←	1	釧路市	4	上川管内	←	4	上川管内
		←	1	札幌市	3	後志管内	←	3	後志管内
11	石狩管内	←	3	石狩管内	3	檜山管内	←	3	函館市
		←	3	後志管内	2	渡島管内	←	2	函館市
		←	2	上川管内	1	日高管内	←	1	後志管内
		←	1	札幌市	17	道外	←	9	函館市
		←	1	帯広市			←	2	札幌市
		←	1	日高管内			←	1	日高管内
←	1	帯広市	←	1			上川管内		
9	旭川市	←	9	上川管内	←	1	釧路市		
9	空知管内	←	4	帯広市	←	1	留萌管内		
		←	3	上川管内	←	1	帯広市		
		←	1	石狩管内	←	1	旭川市		
		←	1	釧路市					

### Ⅲ. 研究Ⅱ

#### 1. 目的

研究Ⅰでは施設出身者の動向から、ケアリーバーが就労の際には近隣地域を中心とした移動、就学の際には札幌都市圏に向けた移動を経験しており、必要なパーマネンシー保障の在り方には差異があることが示唆された。そこで研究Ⅱではそうした実態も踏まえながら道内の地方で社会的養護を経験したケアリーバーが地域コミュニティをどう捉えているのか、地域コミュニティに何を求めているのか、あるいは里親や施設職員といった代替養育者やアフターケアにあたるような支援者は支援において彼らにとっての地域コミュニティのリスクや強みをどのように理解し、実践に結び付けているのかを明らかにする。

#### 2. 方法

ケアリーバーや里親、施設職員などの代替養育者、さらには彼らの自立にかかわる支援機関の職員等を対象とした半構造化面接を2022年6月～10月の期間に実施した(表3)。リサーチクエスション(以下、RQ)は上記「目的」に示した内容であり、属性に沿ってRQを探究するためのガイド項目を準備し、それに沿った半構造化面接を実施した(平均所要時間:78分)。調査は研究者の研究室や研究協力者(以下、inf.)の所属機関、出身施設の

他、地域の会議室など inf.の希望に沿い、静穏性が担保される環境を準備した。

インタビュー調査の内容は IC レコーダーに録音した後、逐語記録を作成し、inf.にその内容を確認していただき、最終的に使用同意を得たものを分析対象として質的データ分析法<sup>5)</sup>に沿った分析を行った。質的研究ではデータの等質性を担保するために、inf.に同じ属性を持つ対象を選定することが多いが、本研究ではパーマネンシー保障をめぐる実態や課題、地域コミュニティのリスクや強みを多角的に捉えることを目的としたため、ケアラー、代替養育者、支援機関職員という異なる属性の方たちを対象とした。このように立場の違う方たちへの調査を通して問を探究することを村上<sup>6)</sup>は「集団のダイナミズムを明らかにする切り口として、有効であろう」としており、本研究の RQ が含む多面性を探究するためには異なる属性の方を inf.として選定することが望ましいと考えた。また、こうした立場の違いによってリスクや強みの捉え方の傾向を理解するために、質的データ分析法で用いられる発言者と言及内容のマトリクスを作成して検討することとした。

一連の分析には質的研究ソフトウェア MAXQDA を用いた。なお、一連の研究手続きは北海道大学大学院教育学研究院の研究倫理審査を受審し、承認を受けた。

表 3 調査協力者 (inf.) の一覧

ID	属性
A	ケアラー
B	ケアラー
C	施設職員
Da/Db	施設職員
E	施設職員
F	里親
G	支援機関職員
H	支援機関職員
I	支援機関職員
J	支援機関職員
Ka/Kb	支援機関職員

D, Kについては同じ機関の複数の方がインタビューに同席された

### 3. 結果

パーマネンシー保障をめぐる実態や課題、地域コミュニティのリスクや強みとして4つの概念的カテゴリーが生成された。以下、各概念的カテゴリーの構成について述べる (表4)。なお、本文中の記述において、概念的カテゴリーは太字、焦点的コードは【隅付括弧】、オープンコードは〈山括弧〉、語りの一部を「括弧」(inf.のイニシャル)で表す。

#### (1) 自立の困難さ

**自立の困難さ**はパーマネンシー保障をめぐる実態や課題について検討する時、前提となる社会的養護児童、ケアラーの自立をめぐる困難さについての実態を示すものである。

【特別な支援を要する子どもの自立の困難さ】は〈支援学校が遠方にしかない〉ため、子どもは寮で暮らし、週末だけしか施設などに戻って来ないことや、障害者就労などをするために〈地域とのつながりを早期に作る必要がある〉といった独特の困難さがあることを示している。

【アフターケアの課題・難しさ】では「よく要対協には呼ばれるんですけど、話はやっぱり幼少の子ども、小さい子どもとか小学生、低学年の子をどうしたらいいのかって話ばかり」(J) というように支援機関における〈高齢児支援の難しさ〉や、〈生い立ちが整理されていない〉こと、〈メンタル面の問題が大きい〉こと、〈経済的な問題が大きい〉ことを含めた〈個別的な支援が必要〉というケアリーバーが抱えている困難さに加え、〈里親家庭・施設によって考え方が違う〉ために必要な支援が多岐にわたることが【アフターケアの課題・難しさ】として挙げられた。

【不安的な自立の状況】としては「誰も知らない場所に行きたいという人も、中にはいて。もう今までの人とのしがらみを1回ゼロにしたいみたいな」(H) というようなケースで〈里親家庭や施設だけで支えるのが難しい〉ことや、〈ケアを離れた直後の孤立孤独感〉の大きさ、就労、就学して一見安定した自立をしたように見えても〈離職・退学の問題〉が生じるケース、そしてそうした難しい子ほど支援が必要にもかかわらず現状ではそうした〈難しい子の支援の手立てがない〉というケアリーバーの自立をめぐる不安定さや支援の困難さが示された。

また、こうした自立の困難さには【地方特有の困難さ】という側面もある。先述したように北海道の広さゆえにケアリーバーの自立を考える際にも〈地域性を考慮する必要性〉があり、特に〈選択肢が都市部に集中している〉ために「高校には入りやすい」(J) 一方で「仕事の種類がまずない。選択肢が少ない」(C) ことが困難となっている。さらに子どもを病院に連れて行くにも都市部まで一日がかりで行かなければならないなど〈地方の施設職員は忙しい〉ことや〈他機関との連携が難しい〉ことなども独特の困難さとして挙げられた。さらには〈地域が疲弊している〉ために社会的養護のことに理解があっても自立に手を貸してくれるような状況になりにくいという困難さもある。

## (2) 特定の他者とのつながり

こうした自立の困難さがある中、特定の他者とのつながりはパーマネンシー保障の中核となっている。

【友人・仲間とのつながり】は彼らがケアを受けていた地域を離れる場合には〈同じ地域から移住する仲間とのつながりが重要な支え〉となり、地域に残る場合には〈同級生とのつながりが地元への帰属感を高める〉ことになり、〈SNS での仲間とのつながりが重要な支え〉となることも含めて自立を支える重要な要素となっていた。特に道内の地方では社会的養護児童に限らず、同じ地域から札幌都市圏に就学就労のために移動してくる若者も少なくない。そうした仲間とのつながりがパーマネンシー保障の重要な構成要素となっている。

【代替養育者・支援者とのつながり】では「丸ごと全部引き受ける」(F) という表現に代表されるように措置が終了した後も〈代替養育者・支援者とのつながりを途切れさせない〉ようにすることや〈措置延長をして支える〉ことでそのつながりを維持する努力がなされている。

【ケアリーバーと地域のおとなとのつながり】では「おじちゃん、おばちゃんに頼もう」(Ka/Kb) というように〈ケアリーバーと地域のおとなとのつながりを作る機会を設ける〉ことで里親や施設職員以外の地域のおとなの中につながる先を創出していくことを重視し

た取り組みが行われている。

【支援ネットワークの大切さ】では代替養育者同士、あるいは代替養育者と支援機関、地域のおとなといったような〈おとな同士のつながりが子どもの育ちの連続性を担保する〉ことにつながっていることや、そうしたつながりを保障するためには地域間の移動が多い北海道の現状を踏まえて〈道内各地に支援ネットワーク、支援拠点が必要〉であるという問題意識が示されている。この支援ネットワーク、支援拠点は道央、道北、道東、道南といった感じで北海道をいくつかに分けてどの地域に移り住んでもおとな同士がつながっていて、それまでの経緯を踏まえた支援が提供できるような体制である。そしてそうした支援を実現するためには〈支援の資源をつなぐ人が必要〉ということで、具体的には自立支援コーディネーターが各地域に配置されて、ケアリーバーと支援拠点や支援者をつなぐ役割を担うことで機能するというイメージは多くの代替養育者、支援者によって共通して語られた。

### （３）地域とのつながり

地域とのつながりには人とのつながりも含むが、特定の人ということではなく、地域に暮らしている不特定多数の人々とのつながりを含め、広く地域への愛着のような意味合いを含んでいる。

【地域の理解の重要性】とは〈社会的養護を受けていることに引け目を感じなくてよい地域性がある〉ことや「小さい町なのでやっぱりみんな助けてくれる」（A）というように〈地域の人とのつながりがある〉こと、そしてそれゆえにケアリーバーに「そんなに大きく困らずに生きていけるだろうみたいな感じ」（A）、「すごく静かで、食べ物というか、静かというイメージがすごくて、自分に合う」（B）という感覚を持たせる〈戻りたい・戻れる場所〉となっている。またこうした地域の理解は〈人材として育成する〉ことにもつながり、〈地域の理解が若者の回復・成長を支える〉ことになっている。

しかしケアリーバーの中にはケアを受けていた場所に戻りたくない、戻れない人もおり、そうした時には【その後を生きるコミュニティを作る】取り組みが必要となっている。まずは住まいを準備し〈地域に居場所を作る〉。そのためには仕事や働き方に人が合わせるのではなく、〈人に合わせて仕事や働き方を創出する〉など、〈制度に縛られず、必要な場を作る〉ことが必要である。そうした過程では〈実際に体験し、失敗することも保証し続ける〉根気強いかかわりや小学生や中学生といった自立に向けた〈準備段階から自立に関わる〉取り組みが行われている。

### （４）進路選択の際の価値

ケアリーバーがケアを受けていた地域での暮らしを継続するか、そこを離れるかは就学や就労といった進路に左右されるために、進路選択の際の価値をどこに置かかがパーマネンシー保障の在り方と関連することになる。

【代替養育者の意向】として〈先々のことを考えた進路選択を進める〉ことや〈大学等への進学について考えてほしい〉という傾向があるが、〈子どもが安心してチャレンジできるようなサポートをしたい〉という意向が強い。その背景には近年、進路決定に限らず〈子どもの意向を確認する大切さ〉が社会的養護の領域で強調されてきた影響がある。

一方、【子どもの意向】としては〈都会への憧れ〉があるために子ども、若者が就労や就学を機に地方から札幌都市圏に移住する意向を持つことや、できれば地方で暮らし続けたいという気持ちを持っているにもかかわらず自分が学びたいことを学ぶため、あるいは仕事に就くために〈やむを得ず地域を離れる〉ことになっている実態が示された。

#### （５）コードマトリクス

道内の地方で社会的養護を経験したケアリーバーが地域コミュニティをどう捉えているのか、地域コミュニティに何を求めているのか、あるいは里親や施設職員といった代替養育者やアフターケアにあたるような支援者は支援において彼らにとっての地域コミュニティのリスクや強みをどのように理解し、実践に結び付けているのかを inf.の属性ごとにとどの程度の言及が見られるかを理解するためにコードマトリクス表を作成した（表 5）。

自立の困難さについては施設職員や里親で多くの言及が見られ、身近で社会的養護児童の暮らしや自立を支えている支援者であるからこそ、彼らが里親家庭や施設から巣立っていく時の困難さを身近に感じ、心配する姿が示されていた。一方、アフターケアやケアリーバーの居場所に関する支援などに関係する支援者たちは特定の他者とのつながり、地域とのつながりの重要性に多く言及していた。特に【支援ネットワークの大切さ】や【その後を生きるコミュニティを作る】ことの大切さなどへの言及があり、既存の支援ネットワークを活用する、あるいはそれが使えない、無い場合には自ら新たなコミュニティを創出することでケアリーバーの支援にあたらうとする姿が示されていた。ケアリーバーが多く言及したのは【友人・仲間とのつながり】や【地域の理解の重要さ】であった。彼らのパーマネンシー保障において、里親や施設職員など、彼らにとっての代替養育者はもちろん大切な存在ではあるが、ケアリーバーは施設内外の友人との関係が維持されること、あるいは地域が自分たちのことを理解して受け入れてくれることがパーマネンシー保障を考える際に重要な要因となることが示唆されている。



表 4 概念カテゴリー、焦点的コード、オープンコード、具体例の一覧

概念カテゴリー 【焦点的コード】 〈オープンコード〉 具体例 (発言者)		N
自立の困難さ	<b>【特別な支援を要する子どもの自立の困難さ】</b>	
	〈地域とのつながりを早期に作る必要性〉 児童相談所と高等養護の3年、2年ぐらい前から、うちの方は独自で2年ぐらいから児童相談所、および、この出身の市町村と連携しながら (中略) やっています (G)	1
	〈支援学校が遠方にしかない〉 (高等養護は) 少し離れた町の学校に行かせています (G)	1
	<b>【アフターケアの課題・難しさ】</b>	
	〈高齢児支援の難しさ〉 中学生、高校生というのはもうあと何年で何とかなるんだから我慢しろよみたいな感じのイメージがある (J)	1
	〈生い立ちが整理されていない〉 具体的な支援の計画を立てたとしても、なかなかうまくいきにくいというケースを掘り下げていくと、やっぱり措置になった理由でずかなせ家に帰れなかったのか。自分の生い立ち、ライフストーリーのところですよね。その整理がなかなかインケアの段階でなされていないという場合も、ほとんどな気がして。 (G)	1
	〈経済的な問題が大きい〉 一番支援の必要なものは、金銭管理がたぶんダントツが多いですね。 (D)	2
	〈メンタル面の問題が大きい〉 メンタルケアの観点はすごく大きいかなと。コミュニケーション能力だったり、対人のスキルとかがない子が多いんですね。 (D)	2
	〈個別的な支援が必要〉 地域性もそうだし、こう、来る子によって一つ一つオーダーメイドなんですよね。 (I)	2
	〈里親家庭・施設によって考え方が違う〉 施設とかその形態によってだいぶ違いがあるなと思っている部分なんですけど。 (H)	1
	<b>【不安定な自立の状況】</b>	
	〈里親家庭や施設だけでは支えるのが難しい〉 正直。非常に厳しい面の子も、今、僕が抱えている子でもなかなか、僕、こうやってあげても、地域からもこうやってあげても、何か自分から離れていく子がいると思うんですね。 (E)	3
	〈ケアを離れた直後の孤立孤独感〉 (ケアを離れて別の場所で暮らし始めて) 1か月ぐらいつと何かずとここにいるのかとなっちゃって、そうかと。さみしいというか、現実を見せられているみたいな感じで。 (B)	2
	〈離職・退学の問題〉 札幌の学校に進学した子が、やっぱり学校に付いていけず、成績、単位を落としてやめたいと来て、園長のところに来て、僕も説得をいろいろしたんですけど、やっぱり1年でやめざるを得なくなった。 (E)	2
	〈難しい子の支援の手立てがない〉 今の制度って。しっかりしているところはしっかりして、助かる子もたくさんいるんですけど、やっぱり助かる制度の今の限界というのは、そこで引っかかってくれる子までなんですよね。それでだめだったら、もう助けられないよってなっちゃうんですよ。 (D)	1
	<b>【地方特有の困難さ】</b>	
	〈地域性を考慮する必要性〉 北海道って地域性でいうと、すごく大きい割には、児相ってぼつん、ぼつんとあって、うちは北海道の反対の端の地域からも来たりもするんです。(中略) そういった中で、地域のニーズをきちんと受けていくべきなんじゃないかというところは考えとしてはあって。 (J)	7
	〈選択肢が都市部に集中している〉 (施設は) 我々も含めて地方が多いので、札幌の近郊は社会資源もありますが、田舎は社会資源の問題、受け皿の問題は大きいですね。 (E)	5
	〈地方の施設職員は忙しい〉 札幌近郊に行かないといけな。 (中略) 仕事の量が倍なんです。本当は、(連携先が) 町内にあれば、ちょっと行ってきてすぐ終わるんですけども、それがいいんです。 (C)	1
	〈他機関との連携が難しい〉 郡部って (社会的養護と地域の橋渡しをしてくれるような機関、NPOみたいなのが) ないんですよ、どちらかというと施設、次は就労支援の相談をする、受ける場所、もう明確ですよ。 (C)	2
〈地域が疲弊している〉 仕事づくりとかで実習とかもお願いしているんですけど、逆に意味で今難しい。人手不足が、逆に人を育てる環境をなくしているみたいな部分がある。 (J)	3	

特定の他者とのつながり	<b>【友人・仲間とのつながり】</b>	
	〈同じ地域から移住する仲間とのつながりが重要な支え〉	2
	社会的養護であったりとかそうでない自分の学校の友達とかも出てきたりするんで、こっちに来てひとりぼっちとかいう感覚はなくて、やっぱり友達がいるところがあるので、(中略)あまり不安はなさそう。(G)	
	〈SNSでの仲間とのつながりが重要な支え〉	1
	そうですね、(地元は)離れますね。でも何だかんだいってみんな(SNSで)つながっていますし。	
	〈同級生とのつながりが地元への帰属感を高める〉	1
	同級生のみならず、帰ってきたときは遊ぶなみたいな、そんな感じで仲良くなっちゃって。それから数年間しかないにもかかわらず、じんわりですけど、ああ、ここが地元なんだという感じになっていって。(A)	
	<b>【代替養育者・支援者とのつながり】</b>	
	〈代替養育者・支援者とのつながりを途切れさせない〉	8
	いつか離れていかなければいけない親でいうところは親じゃないですからね。親は丸ごと全部引き受けるものだから。(F) (自分が施設を離れる時も施設の)先生が何だかんだ手助けしてくれたりとかいろいろ助けてくれたので、そこまで不安ではなかったというか、怖くはなかった。(A)	
	〈措置延長をして支える〉	1
	道外に出た子どもでも若干不安がある子どもに関しては措置継続という形で、児童相談所と話を少しし心配がある子どもに関しては、若干の期間を設けて、その間に見られるんですよ。これはやはり非常にいいことかなとは思っています。(C)	
〈オンラインでのつながりを活用する〉	1	
心のつながりって、なかなか継続的にというのは難しいので(オンラインを使っています)携帯とか24時間鳴ります。相談とかで。メールとか「LINE」とかすごいです。(J)		
<b>【ケアリーバーと地域のおとなのつながり】</b>		
〈ケアリーバーと地域のおとなのつながりを作る機会を設ける〉	1	
出ていった後で困ったときに大人の顔がいっぱいあった方が、こんなことを悩んだ、じゃあ、おじちゃん、おばちゃんに頼もう、お願いをちょっと聞いてみようかとかと選択肢が増えるじゃないですか。だから、俺たちだけじゃなくていろいろな人(中略)と1人でも2人でもいいから仲良くなる、顔なじみになるをやってくれたら(Ka/Kb)		
<b>【支援ネットワークの大切さ】</b>		
〈おとな同士のつながりが子どもの育ちの連続性を担保する〉	4	
リービングケアからつながるアフターケアということがないと、あまり意味がないと思っているんですけども、そのリービングケアが薄い(H)		
〈道内各地に支援ネットワーク、支援拠点が必要〉	7	
例えば道東なら道東に1つとか、道南なら道南に1つとかって、簡単に、僕らもあちこち行きますので、そういう行ける範囲内にあれば、もっと活用度は違ってくると思いますよ。(C)		
〈支援の資源をつなぐ人が必要〉	2	
(自立支援コーディネーターのような人が増えない)全然話にならない。来年度あたりから、もうどんどん。変な話、委託でもいいと思うんです。		
地域とのつながり	<b>【地域の理解の重要さ】</b>	
	〈社会的養護を受けていることに引け目を感じなくてよい地域性がある〉	1
	(知られても別に悪いことがあるわけでもないで、施設育ちだという事を)隠しても隠さなくても別に問題ない(A)	
	〈地域の人とのつながりがある〉	4
	小さい町だから、施設の子だとか、あそこの子だからとか関係なく、地域ぐるみで温かく外からでも見守ってくれているというんですか。心配していただいているというのが、このB町のいいところかなと思っています。(E)	
	〈戻りたい・戻れる場所〉	2
(自分が暮らしていた施設のある)A町に戻ることになって安心したとかほっとした。とても困った状況になったら、やっぱり自分にとって戻ってこられる場所だった。(だからこそ)もっと何か自分は別の世界で暮らしてみたいと思った。(A)		
〈地域の理解が若者の回復・成長を支える〉	2	
(都市部でうまくいかなくて戻ってきても)町の人が「ああ、A園にいた子ね。いいよ。園長とEさんの名前書いておいて」って言われて。町の方がサポートというか、企業も園長や私のことを知っているの「いいよ」って。本当に町のバックアップって大きいですね。(E)		
〈人材として育成する〉	3	
何か最初からちゃんとした人にやってもらいたいな。そこが、そうですね、何か理解が足りないというか、そもそもそういう目線じゃない、姿勢じゃないんだよなと思いますね。(H)		

地域とのつながり	<b>【その後を生きるコミュニティを作る】</b>	
	<b>〈地域に居場所を作る〉</b>	2
	近所に私のことをよく理解してくれて、ご飯を食べさせてくれたりとか甘酒を飲みにおいでとってくれたりするおじさん、おばさんがいたりだとか、何か失敗しても話ができる人がいれば結構こんな自分なんかと思っている自分でも、自分も頑張ろうみたいな頑張る源泉じゃないけど、安心できる居場所づくりというのは絶対に大事じゃないかなと思っているんですね。(Ka/Kb)	
	<b>〈人に合わせて仕事や働き方を創出する〉</b>	1
	企業が必要な人材っていうなんか頭が硬いんですよみんな。生きている人に合わせて仕事作ってっていう観点がないので、なんかもうけのためとか。そういうの。働き方が多様にならなければ厳しいなと。(I)	
	<b>〈制度に縛られず、必要な場を作る〉</b>	1
連続的な支援の保障みたいなのはいやいや当たり前じゃんって思っただけです。途切れている方がおかしいってどうか(中略)それは制度の都合だけなので本人にとっては関係ないからなんかその特別なことじゃなく、当たりまえのことって私は思っていますね。(I)		
<b>〈実際に体験し、失敗することも保障し続ける〉</b>	2	
失敗しても帰ってくる場所があるというのも、やっぱり私たちにとっては強みだよな。たださっきの失敗して経験して分かること、痛い思いをして。痛い思いをさせないように事前にやるというのも大事だけど、事前にも一応伝えるけど失敗経験でやっぱり分かることも多いから、そのためのその受け皿みたいなものもつくっておいてあげる。(Ka/Kb)		
<b>〈準備段階から自立に関わる〉</b>	2	
社会的養護施設の子たちは、施設の中で(仕事やおとなの暮らしに)触れる機会とかもどんどんあった方がいいのかなと思いますよね。(J)		
進路選択の際の価値	<b>【代替養育者の意向】</b>	
	<b>〈子どもの意向を確認する大切さ〉</b>	4
	あなたは誰を頼って今後自立したいと、どういう自立をしたいと願っていますかという、面談(をしている)(E)	
	<b>〈先々のことを考えた進路選択を勧める〉</b>	2
	(離れた町の高校に行くよりも)地元の高校に行ってもらって、その間にその後のことを自分でどうしたいかということ、選択権を与えながら整理しようかということで。(E)	
	<b>〈大学等への進学について考えてほしい〉</b>	1
施設の長い子でも自分の将来の夢なり、それを一般の子どもと変わりなく、苦労するけれども実現できるよというような先を見た夢を与えるような環境が必要(E)		
<b>〈子どもが安心してチャレンジできるようなサポートをしたい〉</b>	1	
どの子にも、辞めたから失敗だとか、辞めたから絶望とか、そういうのじゃなくて、チャレンジして違う道がまた見つかるかも分からないから、1回フィードバックしてまた見てみようかという。チャレンジを与えるようにはしているんですね。その雰囲気は常につけているのかなと思います。(E)		
<b>【子どもの意向】</b>		
<b>〈やむを得ず地域を離れる〉</b>	2	
(自分が希望している資格を取得できる学校が)私が探しているときは数ヶ所しかなくて、その中から受験して合格した(都市圏の)大学に来たという感じ(B)		
<b>〈子どもは都会に憧れる〉</b>	3	
施設に来た子どもで都会で買い物をしたり、いろんなものが手に入るという経験をしてしまうとなかなか。(E)		

表中Nの数字は発言者の人数を示す

表5 コードマトリクス

概念カテゴリー【焦点的コード】	〈オープンコード〉 の個数	ケアリーバー		施設職員・里親				支援者				
		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K
<b>自立の困難さ</b>												
【特別な支援を要する子どもの自立の困難さ】	2	0	0	<u>1</u>	<u>1</u>	<u>2</u>	0	0	0	0	1	0
【アフターケアの課題・難しさ】	6	0	0	2	2	0	0	1	2	1	1	0
【不安定な自立の状況】	4	1	1	0	<u>2</u>	<u>2</u>	0	1	1	0	0	0
【地方特有の困難さ】	5	0	0	<u>5</u>	1	2	1	2	2	1	<u>3</u>	1
<b>特定の他者とのつながり</b>												
【友人・仲間とのつながり】	3	<u>2</u>	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0
【代替養育者・支援者とのつながり】	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0
【ケアリーバーと地域のおとなのつながり】	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	<u>1</u>
【支援ネットワークの大切さ】	3	1	0	1	1	0	1	<u>2</u>	<u>2</u>	1	<u>2</u>	<u>2</u>
<b>地域とのつながり</b>												
【地域の理解の重要性】	5	<u>3</u>	2	0	0	2	0	0	1	1	1	2
【その後を生きるコミュニティを作る】	5	0	0	0	0	0	0	0	0	<u>3</u>	2	<u>3</u>
<b>進路選択の際の価値</b>												
【代替養育者の意向】	4	0	0	0	1	<u>4</u>	1	1	1	0	0	0
【子どもの意向】	2	<u>1</u>	<u>1</u>	<u>1</u>	<u>1</u>	<u>1</u>	0	0	0	0	0	0

各inf.欄の数字はinf.が言及した〈オープンコード〉の個数を示す  
**太字**は半数以上の〈オープンコード〉に言及が見られた箇所を示す

加えて、ケアリーバー、施設職員に多くみられたのは施設児童が自立していく時、以前に比べて【子どもの意向】が重視されるようになってきていることである。支援者の側から継続的な支援の提供を考えた時にはケアを離れた後もケアを受けていた地域に留まる方が効率的ではあるものの、都市部へのあこがれや就労就学の選択肢の多さなどもあり、子どもたちはケアを離れた後、その地域を離れていくことを選択することが多い。そうした実態を前提として以下にパーマネンシーを保障するかについての試行錯誤が重ねられている。

#### 4. 考察

第I研究でも示されたように、道内の地方都市で社会的養護を経験した子どもたちの多くは就労や就学を機に社会的養護を経験した場所を離れていくことになる。そうしたことは道外の他地域でも起きていることではあるが、北海道という場所柄、その移動距離が遠方に及び、支援関係を継続することが難しい、すなわちパーマネンシーが保障されにくい状況にあることが明らかになった。

しかし、インタビュー調査を通してケアリーバーの中には確かに札幌のような都市部での生活を積極的に希望するものもいるが、可能ならばケアを受けていた地域に暮らし続けたいという希望を持つ者もいることが明らかになった。ところが、地方にある選択肢が少ないことや地域自体が疲弊しており社会的養護経験者のような困難を抱えた若者たちを支え続ける余力がないことを理由にして“地元”を離れざるを得ない現状にあることも明らかになった。こうしたことが道内の地方都市で社会的養護を経験したケアリーバーのパーマネンシー保障の困難さの背景にある重大な問題だと言えるだろう。

では本研究のRQにおける中核的な問いである、そうした状況の中でどのようにパーマネンシーを保障するかという点について目を向けて見よう。地元を離れる場合もケアリーバーにとって地元で得たつながりは重要な意味を持つ。特に一緒に地元を離れ、都市部で就職、就学する同級生のような仲間は彼らにとって重要な支えとなる可能性がある。しかし、そうしたつながりが“永続的”なものかということと必ずしもそうではなく、特に彼らが

就労や就学に問題を抱えるようになるとそうした関係が途絶えていってしまうという問題もある。一方、施設職員や里親といった代替養育者との関係も重要である。ひとつは“地元”を離れて都市部で暮らし始めてからも定期的に連絡したり、訪ねて行って様子を見たりするような関わりによってパーマネンシーの保障が試みられる形がある。またもうひとつの形としては、一度は都市部で就労、就学したケアリーバーが“地元”に帰ることを選択した時の受け皿となる形である。ケアリーバーの多くがケアを離れる際に“地元”も離れるという選択をする中で、ケアリーバーと代替養育者との関係が途絶えずに維持されることがケアリーバーが“地元”に帰ることを選択した時の受け皿となる前提となることが伺われたが、この時、単に代替養育者との関係だけではなく、ケアリーバーが“地元”への愛着のような感覚を持っていることが重要な要因となることが示唆された。本研究で話を聞かせていただいたケアリーバーが、自分には“地元”があるからこそ、そこを離れて自分のやりたいことにチャレンジすることができたと言ったこと、あるいは一度は“地元”を離れるがいつかはそこに戻って働くことを目標にして頑張るという気持ちを持っていると言ったことは、彼らにとってのパーマネンシーの保障が常に身近に頼るべき人がいる、安心して過ごすことができる“地元”があるという形だけではなく、いざという時には頼ることができる利用可能な安全基地としてのつながりや地元への愛着があるという形で保障される可能性があるという事を示唆するものであろう。

一方、自分がケアを受けていた時のつながりの中には戻りたくない、戻りにくいケアリーバーもいる。その時、ケアを受けていた場所ではない新たな場所が“地元”となっているケースもあった。そうしたケースではアフターケアに関わる支援者、支援機関が住まいや仕事、人とのつながりなどケアリーバーが暮らしていくために必要な環境を準備することで新たに“地元”を作り出そうとする取り組みが行われていた。この時、先に述べたように道内の地方都市では地域自体が疲弊している場合もあるために、地域の既存の資源に頼るだけではなく、自分たちで新たに仕事を生み出すなど、新たなコミュニティを創出するようなことに取り組んでいることが明らかになった。

#### IV. まとめ

北海道で自立支援コーディネーターを務める安田<sup>7)</sup>はケアリーバーが“その後”の暮らしにおいて何を拠り所にして生きるかについて①目的がある、②頼りたい人がいる、③良い思い出や印象があるという3つの要素があることを提示した。例えば進学を希望する学校が施設や里親家庭がある地域にある場合には①と②（あるいは③も）重複する中で“その後”の暮らしをスタートすることができるのに対して、進学を希望する学校が遠方にしかない場合には①か②の選択を迫られることになる。北海道に当てはめて考えてみると札幌近郊に比べ、地方都市では後者のような状況が多く生じているのである。実際には多くの場合、①が選択されるが、まさにこれが、パーマネンシーが保障されない中での自立である。

安田が提言した3つの観点から本研究の知見を検討してみたい。①目的があるということについて、北海道の社会的養護児童に限らず、そもそも社会的養護児童は将来展望を持

ちにくいという先行研究の指摘<sup>8)</sup>があるように、明確な目的が持てないままにケアを離れる日を迎える場合も少なくない。しかし現実として就労、就学のいずれを選択するにしても彼らはケアを受けていた場所を離れることを余儀なくされる。すなわち、明確な目的の有無によらずケアを受けていた場所を離れることになる。この時、明確な目的があれば職場や学校で多少困難に直面してもそれを乗り越える力になるかもしれない。しかし、そうでない場合には離職や退学という選択が身近なものになってしまうだろう。こうした状況では頼りになる他者の存在が大きな支えになるが、社会的養護児童やケアリーバーの中にはそうした存在がいないと感じている人も少なくない。北海道の地方でケアを受けていた場合には、そうした存在がいたにしても就労や就学でケアを受けていた場所を離れた後にその人が身近にいるわけではないという現実がある。さらに彼らがケアを受けていた地域に対してどれほどの地域的な愛着を感じているか、すなわち「あそこなら安心して暮らしていける」というような安心の感覚を地域に感じる事ができているかは、その地域を離れた場合にも彼らの“その後”の生活において大きな支えになる。しかし、現状ではケアを受けていた場所で暮らし続けることを自ら望む社会的養護児童は少なく、またもし彼らがそれを望んだにしても地域に雇用や教育があるわけではないために実際にその選択をすることは容易ではない。

こうしたことを踏まえ、本研究では北海道の地方で社会的養護を経験した若者たちのパーマネンシーを保障するために以下の4点を提言したい：①インケア中に明確な目的を持てるように支援すること、②ケアを受けていた場所を離れても支援者をはじめとする他者とのつながりを維持することができるように支援や制度を整備すること、③彼らがケアを受けていた地域がいつでも帰って来られる安全基地となるようにインケア中から地域とのつながりの中で子どもを育てること、あるいは④そうした場所がない場合には新たにそうしたコミュニティを創出すること。

## 謝辞

調査にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。また本研究に関連してシンポジウムを開催いただきましたが、そこにご参加くださり、感想等をお寄せいただいたみなさまにも感謝申し上げます。

---

<sup>1)</sup> 永野咲, 有村大士 (2014) 社会的養護措置解除後の生活実態とデプリベーション : 二次分析による仮説生成と一次データからの示唆, 社会福祉学 54 (4), p28-40.

<sup>2)</sup> ブリッジフォースマイル調査チーム(2015) 全国児童養護施設調査 2015 社会的自立に向けた支援に関する調査-施設職員アンケート-, ブリッジフォースマイル.

<sup>3)</sup> 伊藤嘉余子, 高橋順一 (2019) 児童養護施設退所者の幸福度に影響する施設ケアに関する検証 : 施設退所者アンケート調査結果からの考察, 社会問題研究 68, p39-48.

<sup>4)</sup> Walther, A. & Stauber, B. (Eds.) (2002) *Misleading Trajectories Integration Policies for Young Adults in Europe?* Springer Fachmedien Wiesbaden.

<sup>5)</sup> 佐藤郁也(2008)『質的データ分析法』新曜社.

<sup>6)</sup> 村上靖彦 (2019) 「立場を異にする者同士のかかわりの質的記述」をめぐって, 質的研究フォーラム 10, 76-79.

- 
- 7) 安田徹 (2022) 道内の社会的養護経験者の退所後自立生活の実情と課題, 【シンポジウム】道内の社会的養護経験者の“その後”とパーマネンシー保障の在り方, 北海道大学大学院附属子ども発達臨床研究センター/子ども臨床研究部門「研究と臨床のための交流会」(2022.12.27)
- 8) 井出智博, 片山由季, 大内雅子, 堀遼一 (2013) 児童養護施設中学生の時間的展望と自尊感情: 有効な自立支援をおこなうために, 静岡大学教育学部研究報告. 人文・社会・自然科学篇 64, 61-70.